

次年度の技術対策

(1) 土づくりによる気象変動に強い稲づくり

近年は天候の変動が激しく、このような気象条件下でも高品質・良食味米を安定的に生産するためには、透排水性の改良、耕深(根域)の確保、地力の維持・増強などの総合的な土づくりが重要となります。

耕深を確保する、過度の代かきを避ける、有機質資材やケイ酸質肥料の施用等、登熟後半まで稲体の活力を維持できるような土づくりを目指しましょう。

また、使用する肥料の種類が多様化し、肥培管理もそれぞれ違ってきています。ほ場条件や肥料の特性を理解し、適切な肥培管理に努めましょう。

(2) 基本技術励行による収量・品質の安定化

令和元年は、耕種管理の違いにより、初期生育や初期分けつの確保に違いが見られる年となりました。また、登熟期間中の高温の影響と考えられる胴割れ米が多く発生しました。

安定した収量・品質を確保するため、健苗育成(活着良好な苗)、適切な田植え作業(時期、植込本数の確認、植付深の調整等)、生育ステージや気象条件に適応した水管理(浅水、深水、適期中干し、落水時期、カドミウム吸収抑制等)等の耕種管理を今一度見直しましょう。

(例)

- ① 苗の種類、育苗様式に応じた適正な育苗管理の実施:箱当たりの播種量に適した育苗日数として、健苗育成に努める。
稚苗は180g/箱播きで育苗日数は20~25日、中苗は100g/箱播きで育苗日数は35~40日とする。
- ② 活着を良くするための適期田植えと水管理:田植は日平均気温で稚苗13℃、中苗14℃以上の日とし、できれば日中の最高気温20度以上の日に実施し、最高気温15℃以下の日は田植を行わない。田植直後は水深を4cm程度とし、保温効果を高めるためできるだけ湛水状態を保つ。
- ③ 分けつを確保する栽植密度、植付本数、植付の深さ:植付本数は稚苗で4~5本、中苗で3~4本とする。強勢茎を主体に穂数を確保するためには、栽植密度を21.2株/m²以上とし、植付深さは稚苗は2cm、中苗は2.5cmとする。
- ④ 有効茎歩合を高めるための水管理:目標穂数と同等の茎数(県北では450本/m²程度)を確保したら、中干しにより以降に発生する弱勢茎を抑制する。
- ⑤ 登熟期間中の水管理:出穂後に30℃以上の高温に遭遇する場合は、かけ流しを実施し、地温を下げる。フェーンなど、乾燥した風が強く吹送する場合は、水分の急蒸散を防止するため、湛水管理とする。
- ⑥ 適期刈取の実施:出穂後の日数(早生品種:45日前後、中生の晩の品種:50日頃)や籾の熟色(黄化程度90%)、出穂後の積算気温(早生品種:950~1,050℃、中生の晩の品種:1,050~1,150℃)などの判定法を組み合わせ、総合的に判断する。

(3) 斑点米カメムシ類対策

本年は、斑点米カメムシ類の加害による斑点米被害が多く、水田内雑草の多発によりカメムシ類の発生源が多くなったことが原因の一つとして考えられます。今一度、適切な防除対策について確認してください。

【雑草管理】

近年、主要種となっているアサジカスミカメは、水田内雑草で繁殖するため、耕種的防除として本田内及び畦畔にカメムシ類が増殖しない環境を作ることが重要です。

- 農道・畦畔の草刈り
 - ・6月上旬から稲が出穂する10~15日前までに数回行う。
 - ・8月は出穂期10日後頃の薬剤散布から7日以内に草刈りを行い、その後は稲の収穫2週間前まで草刈りは行わない。
- 水田内の雑草防除
 - ・水田内の除草効果を高めるため、畦畔補修等の漏水対策、田面の均平を図り均一な水深を確保する、代かきから除草剤散布までの日数を空けすぎないなど、適切な管理を行う。

【薬剤防除】

- ・出穂期10日後頃の防除(スタークルまたはアルバリン剤)を徹底する。
- ・牧草地・休耕田等の発生源が隣接している場合や、水田内にノビエ、カヤツリグサ科雑草の発生が認められる場合は、出穂期10日後頃と同24日後頃の2回防除を必ず実施する。
- ・薬剤抵抗性の発達を防止するため、2回目はキラップ剤を使用する。